教科担任制（前期課程）

（考え方）

❖前期課程低学年は、児童の多様性を考慮して、一人一人にきめ細やかな指導ができるようにTTで指導する教科を設定します。

❖前期課程中学年は、教科担任制を徐々に増やしていく。ただし、児童との関わりがより多い、隣接学年の教員や前期課程を中心に指導する教員による教科担任により実施します。

❖前期課程高学年は、後期課程を中心に指導する教員による教科担任も可能な限り実施します。

（R1の取組）

1年生　複数教科でTTを実施

2年生　音楽・英語で教科担任制を実施

3・4・5年生　国語・理科等5教科程度で教科担任制を実施

9年間を生かした異年齢活動（教え学び愛科等）

（考え方）

❖前期課程の児童にとって、後期課程の生徒の姿が、憧れとなるように、また、後期課程の生徒にとっては、より強いリーダーの自覚をもつことができるようにします。

❖より幅広い異年齢との交流を通して、思いやりの心と多様な相手に対応できるリーダー性を身に付けることができるようにします。

（R1の取組）

- 特別活動や総合的な学習の時間、教科等について、異年齢での活動や学習をおこないます。
- 児童会活動と生徒会活動との交流や共通の取組を行います。
- 授業や清掃活動の姿を互いに見合い、互いの良さを学び合うようにします。

部活動指導（前・後期課程）

（考え方）

❖部活動の指導を、学園全体の教員で行っていき、児童生徒が部活動に関心をもち、充実した活動ができるようにします。

（R1の取組）

- 前期課程5年生以降、希望者は部活動に参加します。

学校課題

- 自分で考え、判断し、行動する主体性の育成
- 自己表現を支える「論理的に話し、真摯に聞き、積極的に書く力」の育成
- 願いや目標をもち、仲間に働きかけ、仲間と共に高まろうとする意識の育成
- 学校・家庭・地域の連携を深め、地域の中で活躍できる社会性の育成

9年後の目指す姿

地域への誇りを土台に、目標に向かって主体性と協調性を発揮し続ける人材の育成

学校の教育目標

じがく　きょうせい　たんれん

自学　共生　鍛錬

（合言葉）じぶんひとりでも、みんなとでも、がんばれる子

今年度の重点

- ◎ 学校教育計画の具体化と見直し（日課、組織等）
- ◎ 縦の目・横の目ある指導、教え学び愛う子供の姿
- ◎ モデルを育てる、モデルを目指す児童生徒を育てる

市の方針

① 9年間を見通した系統的な学習指導を進め、確かな学力を定着させる。

② 学校、家庭、地域が協働し、継続的な生徒指導を行い豊かな心を育てる。

③ 小・中の教育の在り方や系統を理解し合い、発達段階に応じたきめ細かな指導により、学校生活への適応力を向上させる。

④ 英語教育、ICT教育により、未来に生きる社会に対応できる能力を育てる。

⑤ 地域の実態に応じた小中一貫教育の在り方を模索する。

自学

確かな学力の定着

- ○ 複数課程の教科担任制
- ○ 9年間で高める学習姿勢（話し方・聞き方・反応の仕方）
- ○ 9年間で見直す学習計画（つまずきや効率化、教科横断的な指導の洗い出し）
- ○ 9年間で見直す指導過程（前期の知識・技能、後期の思考・判断）
- ○ 9年間で培う自ら学ぶ意欲をもった学習集団（「分からない」を大切にできる学習集団の育成）
- ○ 9年間で育てる語彙力・表現力（辞書の活用、図書館利用・新聞利用の充実）
- ○ 9年間で身に付ける使える英語力
- ○ 9年間で身に付けるICT活用
- ○ 9年間で見直す補充学習と家庭学習

共生

自治・自浄意識の育成

- ○ 9年間こだわる自治・自浄の願いと目指す姿を明確にした特別活動
- ○ 教え学び合い科を活かした効果的な異年齢集団活動
- ○ 9年間通して人権尊重の気風が漲るあたたかい言動の実践
- ○ 9年間こだわる挨拶・反応（社会に通用する挨拶・反応名人）
- ○ 9年間で作り上げる児童生徒による授業や係・委員会活動（教え合い・伝え合う工夫、リーダーや教科係の活躍）
- ○ 9年間で育てる福祉の心、地域に貢献する人材育成（双樹園交流、校内・地域ボランティア、児童会生徒会サミット、コミュニティセンター行事、地域関連行事等への参画）

鍛錬

志の醸成

- ○ 9年間を生かした、キャリア教育・志教育・本物にふれる体験（地域産業、職場体験、外部講師、高校見学、一日入学等）
- ○ 9年間やりきる目標や目的を明確にした運動の取り組み（体力づくり、部活動）
- ○ 9年間通して自分で生活を律する指導の重視（進路実現に向けた家庭学習習慣、自主学習、家庭でのルール作り、生活習慣）
- ○ 9年間で育てる、自分を守り、地域を守る地域防災人の育成（命を守る訓練、登下校）
- ○ 9年間で築く、伝統の時間いっぱい、すみずみまでやりきる掃除、花活動
- ○ 9年間継続させる教育相談・学習相談・進路相談

地域活性化に貢献する小・中一貫教育

自己肯定感、学力、コミュニケーション力、志、地域資源活用

令和元年度　学校支援課指定

「学校におけるカリキュラム・マネジメント充実事業」についてのＱ＆Ａ

研究全体「カリキュラム・マネジメント」「義務教育学校」のＱ＆Ａ

Ｑ１　桑原学園におけるカリキュラム・マネジメントの考え方を教えてください。

Ａ　全教職員で学校教育目標の具現や，子供たちに力を付けていくために教育課程等を考えていくことだと考えています。たとえば，本校では教科担任制の実施，委員会組織の統合，日課の変更など，義務教育学校として歩んでいくために多くのことを「変革」してきました。

【日課の変更について】

前期課程と後期課程の子たちが共に活動できるように業間の時間を検討したり，中学校において４５分授業を行っている学校から資料をいただき比較したりするなど，職員会議等で時間をかけて検討してきました。その中で教科担任制度を実施していくことや異学年交流や委員会等で共に活動できる環境を整えていくために，朝の活動，昼休み，掃除の時間はそろえてあります。また，授業においても１・３・４時間目の終わりの時間はそろえるなどの工夫をしています。

【教科担任制度について】

後期課程での生活にスムーズに移行していくために教科担任制を積極的に取り入れています。教科係の動きや役割についても後期課程に近付けています。ただし，低学年では，子供たちが安心して学校生活を送ることができるように担任の指導が中心となるように配慮しています。

Ｑ２「カリキュラム・マネジメント」と「研究」はどのように結びついていますか？

Ａ　本校では，カリキュラム・マネジメントの一つで，教科担任制を実施し，子供たちの学力の定着に努めています。より専門性の高い指導，専門だからこそ指導できる教科の本質，９年間の義務教育に携わっているからこそ分かる教科の系統性など。つまり，カリキュラム・マネジメントの中から特に力を入れているのが，本校の研究，教科の指導です。

Ｑ３　系統表がどうして必要なのか？またそれをどう活用していますか？

Ａ　系統表の必要性

９年間の指導事項を俯瞰してみることで，何をこそ指導しなければならないのかがはっきりします。そうすることで他校でも，また，ベテランから初任者まで誰もが活用できるものを目指しています。

Ａ　系統表の活用について

付けたい力（指導事項）を指導者が確実に理解して指導していくことで，指導内容の重なり等を防ぐことになり，かつ，確実に子供たちに付けたい力を定着させることが可能になると考えています。ただし１単位時間の子供たちの姿の中に「系統性」が見えるかと言われれば難しいと思います。子供たちはこれまでの学びを発揮しながら学習しており、「○年生の◆◆で学んだ…」などの発言ができる場合は少ないように思います。

Ｑ４　時間数や教科担任の動きをどのように把握し，教科担任制度を実施しているのですか。

Ａ　毎年の人事異動によって教科担任制度の実施学年と教科を考えています。教科担任制を実施するうえで重要になってくる時間割編成を後期課程の教務が行い，研究や授業の内容に関わることを前期課程の教務が行うなど役割を分担しています。前期課程，後期課程というくくりではなく，９学年が生活する学園であるという点を大切にしています。

A視点「学びの系統性を明らかにし，単元の付けたい力を確実に身に付ける学習指導」のQ＆A

Q１　新しい学習指導要領で授業を構想されているが，評価についてはどのようにしていますか。

A　評価規準については現行のものをベースに，新学習指導要領との整合性を図っています。現在の教育通信（子供の姿）と新学習指導要領が現状では対応していないため。

Q２　「教科横断的な視点」で行う授業の位置付けはどのようにしてありますか。

A　教科で習得した力を発揮できる場を意図的に生み出しています。そのために他教科や他領域，行事等とつなげて，授業を仕組む努力をしています。例えば，国語の学習で提案文の書き方を学び，提案文を書きます。そして学活の中で提案された内容を実現していく方法を考えます。提案された内容が「桑原町のあいさつをよりよくしていくために，地域の人と交流する」というものだったため，実際に地域の方々を招いてあいさつについて意見交流をする場を設定しました。

Q３　教科で学んだことを生かそうと思うと，教科担任と担任の連携が必要不可欠になってきますがどのように行っていますか。

A　職員室が同じであることもあり，教科担任と担任の連携は取りやすい環境にあります。教科担任が学習したことを担任に伝え，担任と共に活用できる時間を考えています。また教科担任の先生に学級通信を配付したり，職員の打合せにおいて学級の実態等を交流したりすることで，情報や「教科で学んだ内容」を共有しています。

B視点「学習の効果の最大化を図るための人的・物的資源の活用の工夫」のQ&A

Q１　「教え学び愛科」とは，およそどのようなものですか？

A　「教え学び愛科」は，異学年による合同学習です。教科，総合的な学習の時間，特別活動等を組み合わせて，合同学習を行います。上の学年と下の学年が同じ教科や領域の場合もあれば，上の学年は教科，下の学年は総合的な学習の時間という場合もあります。

Q２　「教え学び愛科」の基本的なコンセプトはなんですか？

A　上の学年が下の学年を教えることで，下の学年が理解を深めるとともに，上の学年は，自尊心やコミュニケーション能力を高めることができるようになることを狙ったものです。さらには，他人に教えることができて初めて本当に理解している，学んだことを使うことができるとも言われることから，より深い理解をするための機会として考えています。

Q３　「教え学び愛科」とは，教科なのですか？

A　単純に，教科，領域等といったカテゴリーに収まらないのではなかと考えていますが，現時点では，教科ではなく，新しい領域と考えています。同時に，「人権教育」「生徒指導」と同じように，「機能」であるとも考えています。

それは，上の学年にとっての児童生徒に付けたい力から考えると，領域と呼ぶべきものですし，時間数の確保も必要であることから，領域と位置づけることが適切であると考えています。下の学年にとっては，教科，領域等の時間として位置づけることができるのではなかと考えています。

さらに，上の学年においても，教科，領域等の時間として位置づけてよい内容の場合もあります。この場合は，「機能」として，教科や領域等のねらいとともに，「教え学び愛科」としてのねらいも併記することになると考えています。

Q４　「教え学び愛科」を領域としたのはなぜですか？

A　「教え学び愛科」を実施する内容が，教科や領域にまたがることや体験から学ぶことが多いこと，また，児童生徒が主体となって学習を進めることもあることから，教科ではなく，領域としています。そのため，「教え学び愛科」用の教科書はありません。「教え学び愛科」を実施する内容が教科であれば，教科の教科書を使います。また，総合的な学習の時間や特別活動であれば，その時間に必要な資料等を使います。

Ｑ５　「教え学び愛科」の内容にはどのようなものが考えられますか？

Ａ　上の学年と下の学年の組み合わせとしては，領域等と領域等，領域等と教科，教科と教科が考えられます。領域等と領域等や領域等と教科の場合には，いずれの学年も領域等のねらいで授業を進め，同時に「教え学び愛科」の力もねらいます。しかし，教科と教科の場合には，上の学年のねらいを「教え学び愛科」とすることがよいのではないかと考えています。しかし，いずれの学年も教科としてのねらいをもつことができる場合もあるかと思います。こうした点については，今後の実践で検討をしていく必要があると考えています。

Ｑ６　「教え学び愛科」の学年の組み合わせにどのような意図を持たせていますか？

Ａ　教科や領域における学習内容の重なりや共通する内容などをもとにして学年を組み合わせるようにしております。また，敢えて年齢の近い学年で組むことで，互いを意識し合い学習の効果をあげていくことも考えています。このあたりもまだまだ，どことどこの学年を組み合わせていくとよいのか，実践を通して考えている段階です。

Ｑ７　年間何時間ほど「教え学び愛科」の時間を位置付けていますか。

Ａ　学習内容や学年にもよりますが１０時間程度を考えております。ただし，まだまだ実践を積んでいる段階のため，教育課程上に正確に位置付いているわけではありません。汎用性という視点も含めて今後の在り方を考えていけたらと思います。

Ｑ８　何の時間を使って実施をしていますか。

Ａ　時間の生み出しについては８月の後半から学校がはじまるのでそのあたりで生まれた時間を活用しています。主に総合的な学習の時間や裁量の時間を活用しています。場合によっては，教科としてカウントすることもあります。

Ｑ９　異学年同士で学び合う必要はあるのですか。

Ａ　中学生が保育実習にいくと，生徒指導的にも効果があったり，大人としての自覚を持ったりすることが考えられます。また，下の学年の子たちの憧れにもなり得ると思います。

Ｑ１０　複数いる教師の役割に違いはありますか。またどのようにちがいますか。

Ａ　異学年交流の場合，自分の学級や話し合いをしているグループについて指導援助を行っています。具体的な内容で言えば，上の学年は主に関わり方等についての指導になり，下の学年については教科に関わる学びの指導援助を行っています。